

「女性キャリアパス」講義を受けて - - 最終レポート

* 環境情報学府 環境リスクマネジメント M1

「女性キャリアパス」の授業を受けて

「女性のキャリアパス」の講義で多くの研究者の方の努力が基盤となり、横浜国大における男女共同参画の意識が高まってきた、ということがわかり、先生方のキャリアを自分の生活とも重ねることができ大変興味深い授業であった。女性の社会進出は産・官・学すべての領域において期待がされている。官・学ではかなり女性支援の体制が整ってきておりとくに賃金の面では男女差がなく、着実に女性支援の体制が構築されていると思う。しかし、産業界に領域においてはまだまだ女性支援の体制が整っていない、というのが企業で仕事をしていた自分の実感である。いまだに女性は社会進出をしても結婚、出産で自分のキャリアを諦める人が多く、いったん社会から離れると正規雇用で復帰することが非常に困難である。出産、子育てが終了し、社会復帰をしたい、と思った時には親の介護問題が関係し、ますます復帰の機会が遠のいてしまうという現状がある。その理由を自分史と重ね説明する。

経済の高度成長期は企業、公官庁は「終身雇用」「年功序列型賃金体系」「企業内福祉」を元に被雇用者家族には安定した生活を保障し、それは将来の豊かな生活にも連動していた。女性の生活は男性の働きによって決まり、そこそこの男性と結婚すれば、外で働かず、将来の豊かな生活を期待することができた。まさにその時代に社会にでた自分は、結婚、退職、専業主婦というお決まりのパターンを選択した。そこそこの男性と結婚したので、外で働かなくてもよかったのである。

私が勤めた企業は、女性の採用は高卒もしくは短大卒に限られ、4年生大学の女子は採用はするが、給与は短大卒と同等に扱われ、年齢給（年齢によって賃金が変わる）だけが短大卒の女子よりも多い、という体系をとっていた。この体系は当時多くの企業で採用していたと思う。4年生大学を出た女性は同期の4年生大学を出た男子とは初めから差をつけられているので短期大学への進学が人気があった時代である。男子との格差のある賃金体系に疑問や不満を感じる女子は自分のキャリアが生かせる職業を選択し、とくにこの給与体系を疑問にも感じない多くの女性は企業勤務を選択した。この給与体系は長く勤務すればするほど男性賃金との差が開くシステムであった。企業のなかで何の職種に就くかは入社後ひと月にわたる研修がなされた後に人事部によって決定され、私は総務部秘書受付という部署に配属になった。この部署は独身女性のみで構成されており、結婚後も務める、という例は皆無であった。よって私も結婚を機に退職をした。もしこの時点で、結婚退職という選択肢を選んでいなかったら今の自分はまだ企業で勤

務をしていたか、というと、そうではなく、おそらく人員整理でリストラされていたであろう。その理由は私の同期で同じ企業に残っている人はひとりもいないからである。企業で定年まで女性が勤めるのは難しい、と同期の女性のキャリアを見ても感じる。産業界では女性の進出が遅れている、と感じるとした理由はここにある。

専業主婦を十数年して、社会に出たいと思った。そのときに目についた通信教育の広告が「主婦に最適の資格」という宣伝文句で「消費生活アドバイザー」という資格である。通信教育で半年間猛勉強をして、奇跡的にも1回の受験で合格した。当時は個人情報保護法がまだ制定していなかったため、仕事の依頼は企業の方から来た。仕事を依頼された企業の多くはフルタイム勤務を提示してきたが、私はフルタイム勤務ができなかった。理由は母の認知が始まっていたからである。週に1度、実家の掃除を兼ねて、両親の様子を見る、というパターンが始まっていた。よってフルタイムの選択は自分から避けて、夫の扶養範囲内で働ける企業を選らんだ。この時点で自分のキャリアプランは決まってしまったように思える。

消費生活アドバイザーとして消費者の相談を受けるうちに疑問に思ったのが、企業の考える常識と消費者の常識の格差である。私は、アパレルメーカーの消費者相談部署で仕事をしていたのだが、衣服の事故は消費者の製品取り扱いの間違いによるものが多い、ということを実感した。企業は、製品の取り扱い方法を衣服の品質表示で発信しているのだが、消費者は製品を選ぶときにこれをほとんど見ないで購入して着用する。洗たくする時には特に注意して品質表示を見なくてはならないのだが、洗たくは洗たく機任せで行う。製品の取り扱いを正しく伝えるのは家庭なのか、教育なのか、この疑問を解決すべく、大学院で勉強をすることを選んだ。

昨年、修士課程を卒業したが、さらに研究をしたいという思いから博士課程に進学をした。しかし、今自分は親の介護でがんじがらめになっている状態である。介護が必要なのは自分の親なので、夫に頼むこともできず、兄と分担している。欧米では親の介護は公的な施設で専門の人に任せるケースが多いらしいが、本人が施設に入居することを希望しておらず、公的な保障制度も利用できない、というのが私の現状である。現在横浜国大では、保育施設の利用等キャリア形成のためのエンパワーメント事業は着々と進んでおり、若手研究者にとって非常に喜ばしいことである。若手教員だけでなく、介護の現実を抱えた中高年の研究者も研究しやすい職場である、という取り組みのモデル大学になってほしい、思う。私はいま、「中高年でも研究をしようと思ったらできる」ということを、勉強はしたいが踏み出せないという女性に対して一歩を踏み出すきっかけのモデルになれるよう、頑張っている。

女性キャリア

現在、がん専門病院において副看護師長として従事している。

がん患者の看護を行っている傍ら副看護師長として師長の右腕となり、病棟管理的側面での業務も担っている。特に教育的側面において役割を担っており、卒後教育の教育計画に沿いながら病棟の看護の特性に合わせた看護師の育成につなげるため、個々の持ち合わせている力を発揮できるような関わりを持って後輩の育成に関わっている。

また、当院は看護学生の臨地実習を受け入れているため、実習期間中は専任の臨床指導者として学校側の教員と連絡を密にとりながら学生指導にも携わっている。学生は、主に3年～4年生が年間を通して実習に訪れており、学生が主体的に学ぶよう環境作りを配慮し、臨床でしか経験できない機会を出来るだけ多く持ってもらえるよう指導者として心がけている。

このように、病院に勤務する傍らで学生生活も送っている。修士においては、がん患者の看護の中で終末期へと移行していく患者への関わりについて、グラウンデッド・セリー・アプローチの研究方法を用いて、社会福祉士と看護師に焦点を当てて概念生成を試みた。その中で、患者が終末期を受け入れていく過程で、社会福祉士と看護師の関わりの重要性を見出すことができた。中でも、二職種連携が十分に取れることが重要であることが明らかとなった。

今後更にはがん患者の終末期への移行する時期について研究を発展させていきたいと考える。また、自己のキャリアアップを目指していきたいと考えている。

「女性（自分）のキャリアパスについて」

2010年度に行われた「女性キャリアパス」の授業においては、毎回研究者の方々がこれまでに築いてこられたご自身のキャリアパスについて、公私両面にわたる視点による講義が開催された。この授業を通して、改めて女性（自分）のキャリアパスについて、現在自分が感じていることを述べたいと思う。

本来であれば中学から高校在学の時期において、将来のキャリアについて漠然とながらも考えるものであろうが、私の場合は大学入学後に初めて、具体的に言える将来のスケッチを頭に思い描くこととなった。そのことは、学部でフェミニズム関連の授業を受

講したことと密接な関わりがあった。一般的に理想とされる女性像は、社会における主体である男性によって形作られてきたものであること、そしてそれはしばしば古典的で受動的であること。そうしたジェンダー観と歴史について、初めて言語でもって知ることができた。それに続いて古典的・受動的な女性像とはどのようなものか、と具体的に思考を進めていくことができるようになったのである。このようなものの見方を得られたことが、幸運であった。私の場合、自分の一生の職業についての希望は、ジェンダー関連の講義を受講した後、初めて具体的なものとなった。

また、その当時初めて触れた研究を進めたいという思いも強くあった。大学院に入学後は、研究を続けることと、女性として生まれた自分が幸福な一生を送ることという生活における二つの領域を両立させることが将来の大きな目標となった。研究の世界で生きていくということは、率直に言えば研究者として生活の糧を得ること、研究で得た報酬で日々の生活を賄うということである。このことは、想像通り、大変困難な道であった。経済的な自立ができなければ、親か配偶者に頼らなければ生きていけなくなる。しかし、誰かに頼り、生活の糧を得るというやり方は、これまで長い歴史を通して、ほとんどの女性が通ってきた道であり、自分はそれとは異なる生き方をしたいと願っていたのでそれを実現させるよう、様々な試みをしてきた。そしてそれは今後も続くものである。

「女性キャリアパス」の授業では、私が出席した会ではすべて女性の先生方による講義であったが、印象に残っていたことは結婚をし、子供をもたれる先生と、そうでない先生も、共通して女性の生き方に対して視野の広さを持っていることであった。ご自分の研究を誠実に、熱心に進めた結果が今の先生方のお姿であり、そして同時に私生活についても自然な形で努力されてきた様子を窺うことができた。子育てと論文作成の両立に関する具体的なご苦労などについても伺えたことも有益であった。

この授業を通し、また研究を進めてきた今、私は私生活とキャリアについて、以下のように思っている。私生活とキャリアの間に明確なボーダーラインを引くことはできない。研究を誠実に進めることは自分を成長させることでもある。また家族に対し愛情を持ち、家庭での日々を丁寧に生きることは、自分自身を大切に扱うことでもある。配偶者との人間関係は、決して内的なだけのものではない。家庭もまた社会であり、配偶者との関係は、社会との関係でもあるのである。

自らの具体的なキャリアパスに関して言えば、これまで学部、修士課程で続けてきた研究を博論としてまとめる時期に来ており、それをまずは提出することが目下のキャリアの積み重ねのひとつとなると考えている。また、これまでの経験が成果となりつつあり、これまで希望していたことが来年度より少しずつではあるが、形になりつつあることが励みとなっている。

女性の歴史に目を向け、過去との比較をしつつ、自分が 2010 年代の今、どのような生き方ができるのか、今後も常に厳しく自分を見つめながらキャリアを重ねていきたい

と考えている。

* 環境情報学府 環境イノベーションマネジメント専攻 D2

【キャリアとは】

キャリアの定義は様々あるが、主に、仕事（職業・仕事・進路・経歴）を中心とした人生であり、人生のそれぞれの時期に果たす役割（例：子・学生・職業人・配偶者・親・市民…）の組み合わせであるといわれている。ここでの仕事とは、「能力・興味・価値観」を表現するものである。

これまで報告されている様々なキャリア理論の中で、私が最も共感でき自分のキャリアパスの考え方に近いのは、サニー・ハンセンの理論である。彼女の著書「統合的人生設計：Integrative Life Planning (1997)」には、「キャリアとは、自分の満足・生計のための個人的な職業選択だけでなく、意味ある人生、社会に役立つ仕事をするために、一生に何度も選択していくものであり、直線的でなく螺旋的に進むものである。また、キャリアとは「労働（仕事）」「愛（家庭）」「学習（公式・非公式な教育）」「余暇（仕事以外に従事する活動）」の4つの要素が組み合わさって意味ある全体になる」としている。そして、キャリアプランを行なう際の重要な6つの課題を提起している。

- 1) グローバル、かつ社会的に重要な視点から仕事を探す
- 2) 自分の人生（複数の役割）を「有意義な全体」としてパッチワークのように織り上げる
- 3) 家族と仕事を結びつける
- 4) 多様性と包括性を重んじる
- 5) 内面的な意義や人生の目的を探る
- 6) 個人の転機と組織の変革に対処する

以下、自分のキャリアパスを一事例として振り返り、このハンセン理論の視点からまとめらる。

【これまでの自分のキャリアパス】

<学部→大学院、転機①>

学部時代（千葉大学薬学部）は、生物実験分野で大学での拘束時間が長く、また通学往復4時間、塾や家庭教師のアルバイトが週4回ありその2面で多忙な4年間であった。ただ、学部選択理由は、数学と生物が得意であったこと、薬剤師の資格取得は生涯にわたって就職や賃金の面で有利との理由からであった。学年が進むにつれて実験・試験・レポート等の義務感に追われ、自分が本当にやりたいことに従ったキャリア選択で

はないことに気づき始める。周囲のように、卒業して製薬会社に就職するような敷かれたレール、あるいは同じ分野の大学院にそのまま進むことに強い抵抗感を感じた。将来について真剣に悩み、様々な書籍を読みあさっているうちに、「医学する心ーオスラー博士の生涯」（日野原重明 著、岩波書店、1991）と出会い、人生の転機①となる。本書から非常に大きな衝撃を受け、内面からエネルギーが溢れ出し、同大学院に行く道を自ら絶って背水の陣にて自ら主体的に大学院をリサーチし、行きたい大学院（筑波大学大学院環境科学研究科）を見出し、無事進学した。

進学に当たっては、以下の3点を重視していたように思う。ハンセンの課題では1) 5) に近い視点であったと思われる。

- ① 専門分野：薬で治す社会より、病気にならない環境を創造する予防医学や衛生学を学びたいこと。
- ② キャリア：就職→結婚・出産退職→専業主婦→パートではなく、職業人を継続したいこと。
- ③ 人格形成：目指す像となる、尊敬できる方との人脈を形成しながら自らの人間性を高めたいこと。

大学院時代も日々実験に追われてはいたが、どんなに困難なことがあっても自ら選んだ道という責任感もあり、精神的にも研究活動的にも充実した2年間を過ごすことができた。

<学生→就職>

ただ、就職を意識し始めると、自分が本当に研究者としてやっていけるのか全く自信がなく、研究の意義や目的といった志や拘りもなく学位取得も興味がなかった。というのも、いつのまにか指導教官の指示通りに大量の実験をこなして成果を出すマシンと化し、自ら考える考察力が身につけていないのではと思われた。しかしながら、一旦、研究から離れたら戻れないという不安、未知の新しい分野・業種に変える程の自信もなく、一般企業のような営利追及型で組織の歯車になることも避けたかった。今考えると、生活の糧を得るために守りの姿勢で消去法になっていたのだと思う。このため、狭く限定的な選択肢しか考えられず、OB・教授推薦が得られる安全パイから研究職を得た（(財)電力中央研究所環境科学研究所生物科学部）。当時は、本当にやりたいことが見つかるまでの繋ぎとして考えており、非常に消極的な就職であった。とはいっても、就職を決めるための価値観としては、ハンセンの課題1) 4) にも相当する以下の点を重視していたように思う。

- ① 専門分野：環境・エネルギー分野等の多彩な研究員から構成され、学際的な研究機関であること、これまでの専門分野が活かせる点。
- ② キャリア：就職後に学位も取れ、海外出張も多くキャリアの幅が広がる点、福利厚生が充実しており、仕事を継続するならば好・高条件である点。
- ③ 自由度：営利追求・歯車的でなく中立的な研究機関であること、研究環境が整

っており、研究内容・研究費・自分の時間など自由度が大きい点。

<仕事と家庭>

就職後のキャリアパスを表に記す。大まかには以下のキャリアパスを経ている。

- ・1～4年目：社会人としての基盤固め、仕事中心（生物実験の日々、修士時代の延長）
- ・4～8年目：2回の出産・育児休職、家庭中心（育児割合が高く、自分を見つめなおす充電期）
- ・7年目：キャリアチェンジ（実験研究をリセット、社会科学分野へシフト、転機②）
- ・9～14年目：仕事&家庭のバランスを保ちながら成果を蓄積中（山登り中）
- ・13年目：横浜国立大学大学院に入学、在籍中

当所の研究員 700 人余りのうち女性研究員は僅か約 30 名、大半は既婚者であるが子供がいるのは 1/3 程度である。更に、子供二人持ちは私が第 1 号であり、私を含め 2

年度	平成	年数	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1997	9	1	入社(我孫子にある環境科学研究所の生物科学部)											
1998	10	2	動物・細胞実験研究											
1999	11	3	結婚											
2000	12	4	文献調査											
2001	13	5	出産											
2002	14	6	育児休職①											
2003	15	7	転機											
2004	16	8	復帰											
2005	17	9	文献調査											
2006	18	10	異動(大手町にある社会経済研究所の部署へ)											
2007	19	11	別部署に移り、勤務地を我孫子に戻す											
2008	20	12												
2009	21	13	(主人の転職)											
2010	22	14	D1(博士課程入学)											
			D2											
			現在に至る											

名しかいない（逆に現在は、女性も仕事と家庭を両立できる研究機関であるという学生へのアピールとなる）とのことで、当所のリクルートサイト支援情報の一つになっている（http://criepi.denken.or.jp/jp/recruit/12/special/03sp_01.html）。福利厚生制度が整っているとはいえ、女性研究員にとって家庭との両立という点からは厳しい環境である。研究面では成果重視であり、女性研究員も男性と区別なく成果が求められる。私は、比較的早い段階で伴侶を決めていたため、30才までに結婚・出産を計画的に行なった。子供好きで育児は自分でやりたい意志が強かったこと、実家が遠方で支援が得られないこともあり、また、既述の通り当初は研究職への志望動機が弱かったため、逆に職への執着心や昇進に拘りがなく、若い一時期を家庭重視と割り切って自らの意志でシフトできた。研究職の場合、他の職種とは異なり、育児休職の間に周囲の仕事の負担が増えるなど迷惑をかけることが比較的少ない。自分のキャリアや成果がストップ又は遅延するだけなので、それを自分の中で納得できるかどうか、仕事と家庭のバランスを継続する上で重要な要素と考えられる。また、実験研究の計画的な遂行が難しい出産・育児期間中、研究動向等の文献レビュー調査といっ

たデスクワーク中心の仕事で代替し、子供の発熱等にもすぐに休暇が取れるなど、臨機応変に柔軟に対応できる職場条件であったことは、仕事と家庭の両立を継続する上で特に重要であった。

加えて、夫の協力も欠かせない。保育園の送迎や家事など相当協力的に分担してくれることで、夫婦二人で一番大変な乳幼児育児期間を乗り越えることができた。また、家を購入しておらず賃貸なので居住地の自由度が高く、私の職場の近くで、かつ保育園の近く、あるいは駅・学校の近くに定期的に引っ越すなど、ライフスタイルや利便性に応じて居住地を流動的に移動できることも、仕事・家事・育児の時間を最大限効率的にでき、両立の継続を支えている。

自分自身がパートではなく正社員の共働きにより、片方の収入だけでも生活できるような経済面でのリスク分散と自立ができていた点も、両立と精神的な安定に繋がっている。クリーニング（ワイシャツのアイロン代わり）や大掃除（ハウスクリーニング）、買い物（生協宅配）などアウトソーシングで、自分達の貴重な時間を創ることを金銭で解決できる面は大きい。また、食器洗い洗浄機や日々の掃除（ルンバ）など、必要な家電製品の購入により、育児や家事など他の時間を確保できる点も、収入面での安定は両立に欠かせない点であろう。お金の心配をしなくてよいという面では、精神的な安定感が高くなると考えられる。このような周辺環境面での好条件も、仕事を続けながら家庭・子供をもつライフスタイルを継続できたメリットであり、ハンセンの課題2) 5) のような価値観が醸成されていったのかもしれない。

<キャリアチェンジ、転機②>

入社7年目、一人目の育児休職から復帰後より、何のために働いているのかという疑問が沸いてきた。「子どもを預けてまで、やり続けたいことか?」「このままでいいのか?安定を求めたいか?」「何のために仕事をして、自分はこの仕事から何を得られているか?」「研究・調査でなく、単なる作業になっていないか?」「代わりはいくらでもいる。誰でもできる仕事では?」「自分らしく生きるとは?」など、再び自分探しの迷路に迷い込んでしまい、仕事が手に付かなくなってきた。

そこで、様々な資格や職種等から情報収集した。その中で、「キャリアカウンセラー」という職・資格を見つけた際、内面的に大きな魅力を感じ、心がダイナミックに動かされ、転機②が訪れた。早速、通信添削を始め、2回目の育児休職中に資格を取得した。この資格取得講座の受講により、キャリアに関する理論や実践、過去のキャリアのたな卸し、自己分析などキャリアの意思決定プロセスに関して学ぶことができ、自分自身のキャリアを客観的に見つめ直す機会となる。これにより、自分のやりたいことと、仕事を通じて得たいものが繋がってきたため、今後のキャリアパスについて幅広く徹底的に調べ、関係者に相談した。様々なリスク・便益等を複合的に鑑みた結果、同じ研究所内の別の部署に異動することが、最も自分のやりたいことに近く、かつ仕事と家庭をも両立できると判断され、自ら志願して異動が適った。これまでの生物実験研究とは手法が

全く違い、社会科学（社会心理学）分野でのアンケート調査やインタビュー調査が主となるコミュニケーション研究であるが、カウンセラーとしての技術を磨ける点、これまでの自然科学分野で蓄積してきた知見も生かせる分野である点、そして何より仕事を通じて自分のコミュニケーション能力や人間的な成長が期待でき、育児や家庭でも役に立つ一石二鳥である点が大きかった。これは、ハンセンの課題2) 3) 5) に該当すると思われる。また、キャリア開発の概論を勉強したことで、自分のキャリアを主体的に創造していくことの重要性認識が高まり、ある程度客観的に自己評価できる様になった点、およびハンセン課題の6) を自ら成功体験とできたことがキャリアパスに大きな影響を及ぼしたと考えられる。

<社会人学生>

自らやりたいことを見出し、新たな分野で一から勉強を始めて成果も少しずつ増えてきたこと、および子供が成長して次第に手がかかなくなってきたこともあり、研究者として継続していくためによりやうやく学位取得の必要性や重要性を認識し始めた。このため、単にPhD. をとるためだけでなく、研究者としての成長ができる指導教官を見出し、横浜国立大大学院への入学に至る。

【まとめと今後の課題】

以上の点から、仕事・家庭など複数の役割（時期により各配分は異なる）を継続しながら、前向きなキャリアパスを構築していく上での重要点、および得られる人間的な成長面は以下の点と考えられる。

1. **行動力**：新しい分野でも、失敗を恐れず、思い立ったらすぐ実行することで新たな道が開ける。
2. **人脈形成**：新たな出会いと人脈を大切に、尊敬・相談できるメンター（モデル・味方）を増やすことで、様々な視点からアドバイスを得られ、また彼らの良い点を学び、吸収できる。
3. **時間管理**：複数の役割を平行して実施することで、効率的な時間管理により生産性が高くなる。例えば、子供のお迎えがあるため残業や出張が出来ないという制約があり、作業の優先順位や作業時間が決まるため、自分の費用対効果（単位時間当たりの成果数）、自律性を高めることができる。
4. **メンタルヘルス**：仕事・家事・育児・学校や保育園等のPTA・自治会や子供の習い事など、社会における複数の異なる分野・コミュニティとの複合的な相互作用と役割分担により、仕事だけではない様々な面での社会的な貢献は、精神的な刺激と充実感が得られ、気分転換になり仕事もはかどる。
5. **適度なプレッシャー**：仕事を通じて社会に役立つ成果を出すための目標達成に向けて、自分の人生への責任感と充実感が得られる。

今後またやりたいことが変わるなど内的な転機や、組織の変革など外的な転機があ

と思うが、ハンセンの課題6)にあるように、自立的に対処できる力を養いながら、
今後も自ら納得できるキャリアパスを構築・発展させていきたいと考える。

以上